

特集 プラネタリー・ジェントリフィケーション をめぐって

荒又 美陽*

Miyo ARAMATA
On Planetary Gentrification

本特集は、2018年3月24日に行われた小さな研究会が基となっている。「東アジアの文脈におけるプラネタリー・ジェントリフィケーション——理論と事例研究」と題したその研究会は、ちょうどその1年前に社会学者の平田周氏、仙波希望氏が声掛けをはじめ、7月に村田学術振興財団からの助成を受けて発足した「ポスト・アーバニズム・プロジェクト」の一環だった。プロジェクトと言ってもすぐに大きな成果を出すことを目指すものではなかったが、いくつかの偶然が重なってシン・ヒュンバン氏をロンドンから招き、研究会を行うこととなった。彼の滞在中には日本地理学会の都市の社会・文化の地理学研究グループ集会でも講演をしてもらい（講演タイトル「グローバル・イーストにおけるスペクトルとしてのメガイベントの政治経済」）、また原口剛氏と小泉諒氏の案内で2020年オリンピック会場予定地の巡検も行い、そのすべてが刺激的で次の展開につながるものであったが、ポスト・アーバニズム・プロジェクトのメンバーが昨年本誌で行ったプラネタリー・アーバニゼーション翻訳特集との関係も深いことから、ここではプラネタリー・ジェントリフィケーションをめぐる研究会に絞って議論を報告する。

昨年の特集解題(原口・平田 2018)では、「プラネタリー・アーバニゼーション」をルフェーヴル受容第3期のキー概念としている。フランス語から考えれば、「プラネタリー」はそれほど特殊な形容詞ではない。「惑星の」とも訳せるが、まずは「地球規模の」という以上の意味はなかったはずである。しかし現在、少なくとも英語圏においては、この形容詞はルフェーヴルに依拠しつつも新しい視角を示すために用いられているようである。「プラネタリー・ジェントリフィケーション」はシン氏らが2016年に刊行した本のタイトルで、主要概念でもある。本の中では「プラネタリー」という形容詞について「活力を

失ったグローバルよりも生き生きとして成長している」(Lees et al., 2016: 19)としている。

もちろんこの形容詞が選ばれた理由はその新規性のみではない。そこには「グローバル」という形容詞が持つコノテーション、つまり西洋で生まれたものがその他の地域に伝わっていくという欧米中心主義的な見方に対する批判が含まれている(Lees et al., 2016: 4)。ジェントリフィケーションという概念が生まれたのが1960年代のロンドンであったにせよ、その現象はヨーロッパをモデルに世界に広がったというわけではない。各地で、その社会のさまざまな文脈の中で起こっている。シン氏らが2015年に出版した『グローバル・ジェントリフィケーションズ』がその多様性を伝えることを主眼としていたのに対し、翌年に出版された『プラネタリー・ジェントリフィケーション』は一步進んで、その世界的な潮流全体を資本の再編過程の中に捉えようとしており、またそれへの対抗をアジアやラテンアメリカでの実践の中に見出そうとしている¹⁾。

3月の研究会では、本特集のシン氏の講演に続いて、日本寄せ場学会の結城翼氏²⁾から山谷と宮下公園の近年の状況について、高千穂大学・のじれんの木村正人氏から渋谷での排除の実態とそれへの抵抗について紹介していただいた。具体的な内容については木村・原口両氏の論考に譲るが、当日はディスカッションののち、渋谷の現場にも参加者全員で足を運ぶことができ、そこで起きていることや日々の生活について車座になって話を聞くという貴重な機会も得た。その重さも含めて記録したいというのが本特集を組んだ大きな動機となった。当日の集まりへの参加を可能にくださったすべての方々、当日その場にいらっしやっただけの方々はこの場を借りて深く感謝したい。

* 明治大学 (aramata@meiji.ac.jp)

その後も研究会は続いている。今後の展開も含めて、二つの翻訳と解題を3月の議論に付け加えることにした。一つはニール・ブレナーの「批判的都市理論とはなにか」である。ルフューヴルやハーヴェイなどに代表される「批判的都市理論」とフランクフルト学派の「批判理論」を接続しようとする試みである。ブレナーは、フランクフルト学派は都市に目を向けることがほとんどなかったとしつつ、「批判」とは何か、そして都市研究に受け入れられる考え方はどこにあるかに考察を進めている。都市化が地球規模で進んでいる状況（プラネタリー・アーバニゼーション）にも言及されており、本論は都市研究に閉じこもることの危険性を視野に入れさせるものと言える。

もう一つはナイジェル・スリフトの「複雑性の場所」である。タイトルに時代性も感じさせるが、グローバルなサイエンス、グローバルなビジネス、グローバルなニューエイジという三つのネットワークとその相互連関の指摘は、現代世界を解釈するうえでの重要な鍵を提示している。とりわけ最初の二つのネットワークに含まれるサイエンスのメディア化とビジネス教育は、企業経営者たちにある種の知がどのように伝達・普及していくかを具体的に示している。『プラネタリー・ジェントリフィケーション』は、ゼロ・トレランス、ミックス・コミュニティ、クリエイティブ・シティといった共通した政策が世界各地で実施されていると指摘している。スリフトがいう「資本主義の文化的循環」が、世界の政策担当者をもその中に取り込んでいる可能性を考えさせるものである。

本特集の論考は、いずれも現代世界の各地で起きている現象を地球規模の想像力をもって捉える視座を提供するものである。ローカルな文脈を軽視してはならないが、その多様性を越える形で動いている政治、経済、そしてグローバルな権力の背後にある知の存在に意識的になることは、対抗するために重要であるといえる。本特集はその手掛かりの一つを提供しようとするものである。

付記

本特集は村田学術振興財団研究助成「ポスト・アーバニズム理論の構築—21世紀の複合的都市研究のために」(研究代表者: 平田周)のほか、JSPS科研費JP17H02432およびJP17H02430、JP16K16955の助成を受けた研究成果の一部である。

注

- 1) プラネタリー・アーバニゼーションとプラネタリー・ジェントリフィケーションについては、本特集のほか10+1websiteの拙稿を含む特集 (<http://10plus1.jp/monthly/2018/11/>)も参照のこと。
- 2) 結城氏もプラネタリー・ジェントリフィケーションについての論考がある。結城翼(2018)「プラネタリー・ジェントリフィケーション論の批判検討—今後のジェントリフィケーション研究の論点」『理論と動態』vol.11, pp. 41-56.

参考文献

- Lees, L, Shin, H-B., López-Morales, E. (2015) *Global Gentrifications: Uneven Development and Displacement, Policy*, Bristol.
- Lees, L, Shin, H-B., López-Morales, E. (2016) *Planetary Gentrification, Polity*, Cambridge.